

## 長の会

アートウナは、足をぶらつかせたい衝動に駆られていた。座っている椅子は、堅牢で知られる材木、ケエミでつくられている。その生真面目な堅さは、アートウナの尻と背中を痛めた。彼女は、この脚の長い椅子によって宙ぶらりんになっている自分の足を疎ましく思いながら、じっと我慢した。このケエミと同じように、かたく、美しくあれと、目の前の円卓に座る長たちからは無言の圧を感じる。そう思うのは、この長の会に出席するのが初めてだからだろうか。アートウナは、いつも以上に神経質になっていた。

長たちは、白地に金の渦が浮かぶつややかな円卓に、ぞろりと座っている。アートウナと違って、背の長いケエミの椅子に慣れており、思い思いの恰好で雑談を交わし、女王エサルノアを待っていた。アートウナから見て右手には、その女王が座る席―光シスルアの民の席がある。一段高く作られているその白い石机の正面には、王家の印である十本の光線を放つひし形が、銀の光を含んで輝いていた。

この長の会の円卓席につけるのは、仕事人の長おさだけだが、一步下がったところに座らされているアートウナの前にいるのは、魔導師長のノウアではなく、一番弟子のアリアだった。

アートウナは勢ぞろいした長たちや会議の空気に萎縮していたが、アリアはアリアで、初めての代役に、責任による重圧を感じていた。円卓に座る者の中には、アリアより若いアベドはおらず、失言はすぐに魔導師の軽視につながる可能性があった。いくら光の民の補佐として位が高くとも、信頼は魔導

師の実力に起因するのだ。アートウナが足を揺らす衝動を抑える前で、アリアは、頭を抱えたい衝動を抑えていた。

(イドウリ火山島に来たバザンナルシムザグマへ火炎白竜)がすべての元凶だわ。初夏になると必ず暴れにやってくるあいつ。ああ、けれど、一番は、ここで堂々とできない自分が憎い)

離れ島であるイドウリ火山島で、灼熱の白い体をもつバザンナルシムザグマへ火炎白竜)と対峙する師のことを思っては、会議を不安になる自分と比較し、アリアは嫌気がさした。

そんな彼女に、ノウアは島を去る前に最後、「バザンナルシムザグマへ火炎白竜)をぶっ飛ばしたら、飛んで見に行くさ」と励まし、アートウナにも傍についているよう言い渡して(「これは修行の意味もあるんだよ。だから真面目におやり」と師はくぎを刺した)、アリアの後ろに座らせた。

アリアの椅子の背板を眺めながら、アートウナは、この中途半端な席が落ち着かなかった。こんな微妙な位置にいるのは、獣の長おとこシュグレーデンの連れであるトウーラだけだ。猫のような三角顔に、犬のような肩幅をもつそのナクーは、獣の長おとこの後ろで、王の品格をもって、長々と寝そべっている。

(あたしも寝転がって出席したいよ)  
アートウナがあくびをしようとした瞬間、会議室の扉が開かれ、エサルノア女王が入ってきた。長もアリアも立ち上がり、アートウナは慌てて椅子から飛び降りた。

女王が石机に着くや、長たちは無言で座った。「もうそろっているかしら？」とエサルノア女王。

急いで席に戻った拍子に尾骨を打ったアトウナは、涙目で次の言葉を聞いた。

「ノウア殿が、イドウリ火山島にやってきたバザンナルシムザグマへ火炎白竜退治に行っておられるそうです。今回は、代役にアリア殿が出席されております」

アリアが進言する前に状況を説明したのは、菓の長ヤーレイだった。三角の顎髭が円卓にくつつきそうなほど背の丸まった老人で、一番長く長を務める彼は、長の会に異常事態があれば自分がまっさきに伝える必要があると自負していた。

アリアは、先手を打たれたことにより、発言力が菓の人より下だと見られたのではないかと、長たちの顔をさつと読んだ。

「今回は、私が代役を務めさせていただきます」彼女は、間髪入れずはっきり述べた。

「ノウアからも、直接聞いております」エサルノア女王は頷いた。「代役、認めましょう」

その銀の瞳の静けさに、アトウナは驚くばかりだった。アリアよりもいくつか年上であるが、彼女が代役で出ていなければ、長の会の中では女王が一番の年下だ。にもかかわらず、だれにも有無を言わせない力がそこにあった。まるで満月のような、はかなくも絶対的に存在する、あの力だ。

「では、はじめさせていただきます」

言ったのは、アトウナから見て向かいの女王の隣に座る、白髪を刈り上げた壮年の男だった。口ひげにも白いものが混じっている。眉間には切り込んだような深いしわがあり、瞳にも厳しさをたたえていたが、首も背もしゃんとのび、金糸で飾られた白い羽織も清潔感があって、上品な印象を与えた。彼は、慣れた口調で続けた。

「私、師の長おさオルサンは、ここに花の季節の長おさの会を開くことを宣言いたしました。光シスルアの民のエサルノア女王様と、影の人による加護もとの下、偽りのない報告、並びに、平等な理解が、各仕事人にありますように」

オルサン長は、長たちを軽く一瞥し、手元の紙に目を落とした。

「では、各仕事人の活動報告を行います。まず、師の人より、長殿おさと女王陛下にご報告いたします。師の村では今年、八十四の見習い卒業者を得ました。専門学あと堂（仕事人になった後に入ることができる、専門学校）の入学者は全員で、卒業者は九十八人です。また、白の季節の長おさの会から現在の時点で、師の村の死者数は十五人になっております。他の仕事人の移住受け入れ数は、守りの人三、狩りの人二、つくりの人六の、合計十一人です。

エルドルウン峡谷内の橋の件ですが、魔法動物に喰われた後は、ほぼほぼ修復に向かっており、現在、イルヌーン橋とアヤラ橋が通行可能になっております。第三の橋メレーン橋は、暮れの季節頃、通行可能となる予定です。

また、先日、師の村東部の歯はの先市街地で火災があり、一軒の家が燃焼いたしました。幸い、負傷者ともに死者はいなかったものの、家が無人であったこと、加えて、出火に至った原因がいまだ不明であることから、現在、守りの人の〈警備の者〉に、捜査の協力を仰いでいます」

アートウナは、重心を右へやったり、左へやったりして、オルサン長の話を聞いた。……いいや、本当は半分も聞いていなかった。会議室は、端に座る書記が立てる執筆の音しかしない。長からの報告がこれからあと七つもされるのだと思うと、さっそくうんざりしてきた。ときおり、喉の奥が詰まったかのような、苦しそくに鼻をすする音がする。どうやら、向かって左に座る、腹が死

んだ魚のように膨らんだ、商の長バーデウが発しているようだ。緋色の口ひげを生やした豊満な大男で、商の人特有の赤い服は、いままさにはちきれそうだ。首は太く、段々になった二重顎が、襟の上ののっかっている。バーデウ長は、喉のつぶれた啜りをもう一度やって、目を瞬かせた。

「師の村の積雪量は、村の中心部で半ピエノ（5ミリ）、山岳地帯で、多いところでは、一トーシ（十センチ）となっています。ですが、馬便、鳥便ともに、運行は可能な状態です。師の村からは、以上です」

「何か疑問点は？」エサルノア女王が、すつと円卓を見渡した。

「村回りの際に通過した見習いの団体数が報告されていません。師の村では、現在までにどれくらい村回り団体が確認されていますか？」

質問は、獣の長のシグレレーデン長がした。美しい鷲鼻も、編み込まれた髪も、その響く声も、連れのナクーと同じように魅力的だった。狼の羽織は背板にかけられ、筋肉で張った肩はむき出しだ。あれほど連れの獣とアベドは似るものなのだろうか、アトウナは思った。

師の長オルサンは、ちよつと紙をめくり、言った。

「村回り団体は、現在、南部で三十、東部で二十三、北部で十六、西部で七となつています」

村回りはそろそろ中盤にさしかかるころだ。もうじき、すべての団体が村を周り終えるだろう。アトウナは、自分が見習いとなつて、仲間たちとおしゃべりしながら師の人の講義を受ける甘い想像をした。白い見習い帽子をかぶる友人たちが、なにか自分に言っている。何と言っているのだろうか。「見て、あれが私たちの通う学舎なんだって、アトウナ！」師の人の背中にカメムシをつけてやった。いつ気づくか、かけをしようぜ？ アトウナ」

「その前に、あんたも背中を確認したほうがいいよ」

想像の中のアトウナはそう答えた。想像の中の友人は、慌てて背中を叩く。カメムシが落ちる。笑いが起こる。口角が上がったところで、アトウナの視界に円卓が浮かび、笑い声は遠ざかった。圧迫感を覚えた彼女は、深く息を吸って座りなおした。

長たちは、次々と報告を述べていった。アトウナが興味を持って聞こうと思ったのは、商の長おさバーデウの報告で、エイネーの貿易相手であるアスハリエティク国についての話だった。

輸出入額やその他金銭的な報告はともかく、最後に話された交換留学の話は、アトウナの体を少し前のめりにさせた。

「アスハリエティクの〈エテメール・ダアマンルド商業団体〉からの、エイネー、アスハリエティク間の交換かん留学の件について。相手側は今年うちに、経験を積ませるのに適した年齢の若い世代、また、長い航路に耐えられることも踏まえて、十四から三十の歳としのアベドたちを対象に、留学生を募集・決定させたいとの考えを示しています。また、二国の伝統や文化を存分に知るための期間として、留学期間は一年とし、補助金五千万フアメリを提案することです……」

バーデウ長の、つぶれているが威圧的な声を聞きながら、アトウナは、魔導師も行かせてくれないだろうかと思った。

豊かな西の大国、アスハリエティク国。その国への憧れは、幼い頃から抱いていた。エイネー国とは違い、複数のアベド種族が暮らすアスハリエティク国は、一生かけても周りきれない広大な土地を持っていた。遠方デイゴンネーを行き来することによって栄えた港町や、星を読むことにたけたアベドたちが暮

らす森、魔法動物の血液がつくったといわれる湖群、砂と太陽光を食べるアベドが住む砂漠都市……。それでもまだ、未踏の地が広く残っているのだそうので、アートウナは、いつかその見知らぬ世界を旅してみたいと、ひそかに夢見ていた。

だが、想像力と集中力は、淡々となされる報告により、やがて睡魔に変わった。気づけば、向かって左斜め前に座る、長い三つ編みの女が話しはじめていた。自然の長クレアナダだ。

「まず、人口変動ですが、自然の村では二百五十三の見習い卒業者を得、そのうち専門学堂入学者数は百六となっています。他の仕事人の移住受け入れ数は三十二。死亡者数は、白の季節から花の季節にかけて、二十四人となっています」

クレアナダ長は、転がる木の実のように歯切れよく話すが、どこか物々しい陰が言葉の中にあつた。他の長たちは、詳細を読み解こうと、緊迫して身構えた。

その理由は、まもなく分かった。必要な報告事項をすべて述べると、クレアナダ長は言った。

「最後に、噂でもご存知かと思いますが、昨年おまの末、わが村では〈見えない死〉という呪いが発生しました」

長たちは姿勢を改めた。何人か頷く者もいる。

「〈見えない死〉は、自然の村の北部、ワーシユルエン平野とアバルバン谷の間にある〈栽培の者〉ヨウスの畑で、はじめて確認されました。もともとこの畑は、昨年亡くなったイエリオットというアベドが所有していましたが、昨年の暮れの季節より、ヨウスが代わりにこの畑を耕しておりました」

クレアナダ長はその後、〈見えない死〉が及ぼすアベドへの影響や、魔導師ノウアによる精製炎での解呪の終始を、詳しく語った。

「解呪した畑には土喰らいを放ち、自然浄化を試みております。いまだ変化は見られませんが、雑草の繁茂が確認できしだい、使用可能にする予定です。それには、半年からそれ以上の期間が見込まれます。ですが、一番の問題は……この〈見えない死〉が、広がっているというところにあります」

アートウナはぎよつとし、長たちの肩もこわばった。〈見えない死〉は、ノウアが精製炎で解決したはずだ。全部丸く収まったと思ったが、どこかで呪伝してしまっただろうか。

「新たな発生場所は、南部の麦畑と、東部の林檎園、そして昨日、エスコル川の上流で発見された、合計三か所です。いずれも、ヨウスおよび彼の仲間との接点はなく、原因となる共通点も見受けられませんでした。また、精製炎による解呪を同じように行いましたが……」クレアナダ長は、そこで唇を舐めた。「以前より、効果が現れませんでした」

「その三か所は、現在どのような状態なのです？」

女王エサルノアは、クレアナダ長とアリアに訊ねた。銀色の目がわずかに切迫している。

応えたのは、アリアだった。

「エスコル川の方は、まだ現地調査を行っていませんが、そのほか二か所は、先ほどのとおり、精製炎での解呪を試みました。しかし、〈見えない死〉による嫌悪感と吐き気、また、地中にある鉛色の液を完全に消滅することはできず、



「まだ影響が残っています。よって、現在は立ち入り禁止の状態にしています」  
「自然の村以外に、このような現象が起こった地域は？」

女王の問いに、長<sup>おさ</sup>たちは互いの顔を見やり、静かに首を横に振った。

「先ほど、ヨウスの畑との接点および共通点はないとおっしゃいましたな？  
ということは、呪伝によって広がった可能性は低いということですか？」

商の長バーデウが、肉に埋もれた小さな目を鋭くさせて訊ねた。自然の村の農作物を国内に回していくのは、商の人の役割だ。

「魔導師としては、原因の魔法動物が再度〈見えない死〉の力を強めて、呪いをかけたと読んでいます。呪伝は、病の伝染と同じように、ものや生物を媒介して起こりますが、ヨウスの周囲で起こる前に別の場所で〈見えない死〉が発生した今回の場合、呪伝よりかは、魔法動物が新たに呪いをかけたと考えるのが妥当です」アリアは答えた。

「その原因の魔法動物ですが、正体はつかめたのですか？」

訊ねたのは、クレアナダ<sup>おさ</sup>長の向かいに座る女だった。藍に染めた髪を首元で切りそろえ、鷹のような目つきをして魔導師を見ている。彼女は、狩りの長<sup>おさ</sup>ナデルだった。雌<sup>しおう</sup>黄の袖なし服からのぞく腕はすっきりと引き締まっており、その手首にある五つの爪を連ねた腕輪は、彼女の浅黒い肌によく映えた。ナデル長<sup>おさ</sup>は身を乗り出した。「狩の村では、そのような魔法動物の話が届いていません。もし魔法動物の正体がかかめていない場合、対処はより厳しくなるのでは」

「ええ、その通りです、ナデル長」アリアが頷く。「魔法動物の詳細は、いまだ不明なままです。ですので、魔導師からは、ある提案をさせていただきます」

「と思います」

薬の長ヤーセイが睨みを利かせた。商のバーデウ長も同じだった。小鳥がなにを言い出すのやら、彼らの目はそう言っていた。師のオルサン長が、低く咳払いをする。

「魔導師アリア殿、ご提案とは、いったいどのような？」オルサン長が穏やかに訊ねた。

「すべての下級魔法動物の対処を、薬の人へ一任する、ということです。近頃、我々魔導師は、魔法動物の対処に追われています。緊急を要するものを優先的にまわっていますが、それでも追いつきません。魔法動物の被害が相次いでおり、手が足りていないのです。ですので、薬の人へ協力を仰ぎ、〈見えない死〉の解決に、我々は力を向けたいと考えております」アリアは、きっぱり答えた。

薬の長ヤーセイは、三角の顎髭をねじって、女王と魔導師を交互に見た。

「不可能では、ありません」彼は、顎髭にねじこむように、あいまいに言った。「下級魔法動物の呪いは、エイネーの医療で対応できる場合がほとんどです。ですが、患者が求めているのは、そういうことではないでしょう。我々の村で抱える患者たちは、みな、魔導師様の力を一番の薬として信じております。その信じる心が回復につながるのです。我々薬の人は、その一時的な休息所なのです。最終の目的地は、魔導師様にあります」

「賛同できない、ということですか？」エサルノア女王が静かに訊ねた。

ヤーセイ長は、のろのろと答えた。

「この状況下で、その言葉は言えませんが。薬の人は、受け入れますよ。ただし、最終的な心は、民にあるということです。求めるほうに、彼らは動く。医療か、魔法か」

この背の曲がった老人は、諦めをにじませているように、アートウナは感じた。黄ばんで染みだらけになった紙は、時を追うごとにくたびれる。だが、それに加え、長の疲労には理由があるように思えた。繰り返し同じ失望を味わった者の屈服のような……。

「下級魔法動物による呪いの治療を、薬の人へ流すよう義務化すればよいでしょう」狩の長ナデイルは、早口で言った。「〈見えない死〉の魔法動物捕獲が最優先です。遅くなればなるほど、我々の首は締まるいっぽうです」

これには、自然の長クレアナダが強く頷いた。

「現時点では、収穫量の大幅な減少は見られませんが、このような状態が続いた場合、エイネーの民に供給する食料が足りなくなるのは確実です。自然の村の耕作地域に〈見えない死〉が広まれば、エイネーの食糧生産力は、危機的なまでに落ちるでしょう」

「〈見えない死〉が実際どのようなものか分かりませんが……」言ったのは、壁のように大きな、つくりの長ダムだった。ケエミの椅子から体が横に半人分はみ出ている。彼は、円卓など簡単に叩き割れそうな丈夫な手を、繊細に組みながら頷いた。「耕作地域および林業産業地域でもある自然の村が甚大な被害を受ければ、我々も安定した価格の製品を生み出せません。薬の人による下級魔法動物治療義務化は賛成です」

「もし、解呪が間に合わず、〈見えない死〉が爆発的に広まった場合……」

狩のナデイル長が、女王に顔を向けた。「我々狩りの人は、食糧不足を緩和するため、デイゴンネーへの狩猟班を大幅に増やす必要があると思われます。いかがでしょう、陛下？」

エサルノア女王は、目を細めたあと、頷いた。

「いいでしょう。どれくらい増やすかは、ナディル長<sup>おき</sup>、あなたに任せます。ですが、くれぐれも血<sup>スロッド</sup>の民の怒りをかうことはしないように。下手にデイゴンネーに行かせる人数や回数を増やせば、危険も増します。それを踏まえて、班を増やす度合いを考慮してください」

血<sup>スロッド</sup>の民と聞いて、アートウナの気持ちは暗くなった。血<sup>スロッド</sup>の民は、デイゴンネーに住む背の高い種族で、初代女王エイネナムをエイネーへ追いやった元凶とされている、野蛮な一族だ。なんでも、アベドの卵を乱獲し、しまいにはアベドも足で踏みつぶして食べたのだとか。いまでも、血<sup>スロッド</sup>の民に出会ったという狩の人はいる。しかし、血<sup>スロッド</sup>の民の何を見たのか、彼らは、二度とデイゴンネーへ行くことができないほど心的外傷を負うようだった。

狩の人は、そんな危険を冒してまでも、デイゴンネーへ向かう。エイネーの民の腹を満たすためだ。その回数を増やすというのだから、ナディル長は、狩の人の鑑でもあり、狩の人の<sup>シラ・ザダーグ</sup>（エイネーにおける死神のような存在の魔法動物）でもあった。

「各長たちは、それぞれの仕事人に、下級魔法動物の対処を薬の人へ流すよう、徹底的に伝えてください」女王は言った。「魔導師は、〈見えない死〉の解決を早急に行うこと」

長たちおよび、代理のアリアは頷いた。だが、その中で、クレアナダ長とバーデウ長の間座る、猫背で細身の男は、挙動不審だった。長にしてはずいぶん控えめで、ほくろが三つ、縦に長い蒼白な顔に、三角を描くようにしている。髪は、埃をかぶったような、色の淡い巻き毛だった。

それが守りの人の長<sup>おき</sup>キシトゥーであるとき、アートウナは納得し

た。守りの村は、用のない緊急の手紙を一番多く送ってくる村だ。長は、仕事人と魔導師の間で交わされる手紙に直接関わっているわけではないが、「仕事人の動きは長の動き」と言われるように、締まりが悪いと、守られるべき約束事も無視される。守りの村は、キシクトー長が魔導師への手紙の基準を徹底していないがために緩みが出ているのだろうと、アトウナは推測した。キシクトー長は、それを自覚しているし、きつとエサルノア女王も他の長も気づいているのかもしれない。彼は長に値しない、と。彼がこの長の会で一言も話していないところからも、彼の力が弱いことを読み取れた。キシクトー長は、きつと、アトウナ以上に居心地が悪いのかもしれない。

魔導師への手紙は、かつて、長たちの検閲を通ったものだけ魔導師に送られていたと、アトウナはノウアから聞いたことがあった。しかし、時間や労力がかかるうえ、手遅れになった案件も多かったという。これを踏まえて、先代のカサレア女王は、魔導師と仕事人の風通しをよくするべく、長たちの検閲を撤廃した。現在のエサルノア女王もそれを引き継いでいて、各村の長たちも、ここ九年、ずっと従っている。だが、この制度は新たな問題を生み出した。それが現在の状況―緊急でない手紙も魔導師に送られる、というものだった。それに、問題は仕事人側だけではない。魔導師の方も、人数の減少により、際限のない手紙の対応に手が回らなくなっている。

そこで、エサルノア女王は、魔導師への負担を減らすべく、魔導師要請の度合いを改めて定めた。それが、魔導師要請新基準というもので、仕事人も見習いも、それに倣うことが基本となった。だが、現実はそううまくいくものではない。魔導師たちの元には変わらず緊急の手紙がやってくる（この「緊急」という赤文字を書くのも、魔導師の目につきやすいよう、仕事人たちが考え出したものだった）し、誰でも直接魔導師に手紙を送れるようになったおかげで、

どれほど呪いの症状が軽いものでも魔導師を呼ぶようになった。これは、呪いの症状が病とそれほど差異がないため、一般のアベドには判断がしにくいということと、魔導師が公務であることに関係していた。魔導師を頼るアベドたちは、薬の人から治療費を取られるよりも、公費でまかなわれる魔導師に、まず賭けるのだった。加えて、薬の長ヤーセイが言ったように、魔導師を心の支えとするアベドが一定数いた。薬の人よりも魔導師に頼ることが減らないのは、こういったことが原因なのだった。

この問題を解決するには、長の力が鍵<sup>わき</sup>だった。守りの村のように放任するのではなく、新たな基準に従うよう、長は厳しく伝えなければならない。これがうまくいくかどうかは、魔導師や長<sup>おき</sup>、そして女王らの力に左右されていた。

（守りの村は、キシュトー長が変わらない限り、手紙がこっちに送られ続けるだろうな。キシュトー長が変わるか、それとも長自体が変わるか……。どっちが早いだろう）

アトウナは、キシュトー長の青灰色の顔を眺めながら思った。目のふちが赤く、膨らんだ隈が目立つ守りの長は、若いはずなのに、師の長オルサンよりも老けて見えた。

その間に、魔導師アリアが報告を行っていた。彼女は、昨今の魔法動物被害について語っている。狩の村の〈<sup>エンバウナ</sup>夢炎〉や、守りの村の泣き虫〈<sup>ヤークアナラ</sup>虹の猫〉、そして一番最新である〈<sup>バザンナルシムサグマ</sup>火炎白竜〉について。

そんな彼女の向こうから、長たちがこちらを見ていることにアトウナは気づいた。平静を装うが、息がしづらい。なにかを求めるその目たちは、アトウナを萎縮させた。

長たちはというと、小さな赤毛の魔導師があおきの席に座っているというところは、何か話すことがあるのだろうと期待していた。普段、めったに大衆の前に姿を現さない炎の魔導師は活躍の話がまだ出てきていないが、その実力を少しでも知りたいものだ、と。

だがしかし、アートのウナが話をすることはなかった。彼女はアリアの影でしかなく、長たちの目は、だんだん無関心になっていった。

その冷たい無視は、アートのウナを傷つけた。ノウアに対する怒りがわいた。ここにいろと言われて座っているのに、だれにも必要とされていない。やはり、獣の長のナクーのように、すべてのことなどどうでもいいという態度でいたほうが楽なのだ。けれど、魔導師アートのウナには、そういった楽観的な思考がなかった。注目しろ、あたしを見ろ、そういった燃え盛る願いが、アートのウナの身を焼き続けた。そうして、自分が発言する必要性がないこと、また、無言から脱する勇氣もないことに、いらだちを募らせた。

アリアと自分との間に分厚い壁があることを理解した時、アートのウナには、もはや言葉など聞こえていなかった。だから、長たちが差し迫った表情でアリアに詰問していたと気づくのに、少々時間がかかった。

「その空を食っていた者たちは、まだ何者か分からないのですかっ」

「槍とおっしゃいましたね。アバルバン谷から放たれたというのは本当で!？」

アリアは、〈天守り〉と〈内世界〉の空で起こった話をしようだった。薬の村の療養所にいるマノという少女にとりついてた話をしたようだった。薬

とアートのウナは、マノから引き離したのだ。けれどその際、〈天守り〉はアリア

アを〈内世界〉へ連れ去り、空が何者かに食われていることを知らせた。〈天守り〉

はそのあと、アバルバン谷から放たれた黒い槍に貫かれ、海へ落下してしまっ  
た……。

魔導師しか知ることのない〈内世界〉の情報は、アベドの住む世界〈現〉<sup>げん</sup>に  
も影響するため、長の会のなかでも特に重要だった。〈見えない死〉で警戒体制  
に入っていた長たちだったが、この話は、より混乱を招き、質問はやまなかつ  
た。

「〈天守り〉<sup>グロナーシユ</sup>が空から少女の〈黄身〉<sup>シラ</sup>へとりついたのは、いつのことなのですか？  
マノという少女は無事で？」

「〈見えない死〉と何か関係が？」

「我々はどこから怒りをかったのか……。なぜこんなにも不穏な出来事が……」

「〈天守り〉<sup>グロナーシユ</sup>の不在は、今後の天候になにか影響が？」

「アートウナ様は共闘なさらなかったのか？」

突然、誰かがアートウナに質問した。

「え……。あたしは、〈現〉<sup>げん</sup>にいて、補佐をして……」

だが、アートウナの答えは、誰も聞いていなかった。

「この雪は〈天守り〉<sup>グロナーシユ</sup>が放ったということでしたな。いつ止む見込みなんです？」

「空を食う者は、いったいそこで何をしようと……」

「アバルバン谷からの槍は、〈天守り〉<sup>グロナーシユ</sup>の怒りをかったのではないですか！？」

「〈天守り〉<sup>グロナーシユ</sup>は、いまどこにいるのです？」

「彼らがエイネーに及ぼす影響は！？」

すると突如、エサルノア女王が、「静粛に」と声をかけた。大きな声ではなか



ったにも関わらず、室内を覆っていたざわめきが、さあつと波のように引いて、消えた。長<sup>おき</sup>たちは、何を考えるでもなく、自然と口を閉じてしまった。

女王エサルノアは、落ち着いたその銀の目で、長<sup>おき</sup>たちを見渡した。アートルウナは、ぞつとした。光<sup>シスルア</sup>の民エサルノアは、権力を振りかざす高慢なアベドではない。けれど、いまのような、無魔力のアベドたちには気づかないやり方で沈黙させる魔法には、恐れを抱いた。美しく、勇ましく、厚意に満ちたアベドだが、つかみどころのない妖しきがあるのも事実だ。アートルウナは、魔導師の役割の一つ、光<sup>シスルア</sup>の民の監視の意味を、いまふと知った。

「地上と天界、〈現<sup>げん</sup>〉と〈内世界〉という、私たちは、それらが重なり合うところで生きています。どちらにも問題が生じた場合、混乱をきたすのは当然のことです。ですが、今は何も分かっていません。魔導師アリアは、現時点での事実を述べたままです。〈内世界〉の空が何者かに蝕まれ、〈天守り<sup>グロナーシユ</sup>〉は攻撃され、魔導師アリアは混乱を避けるべく、仕方なく〈天守り<sup>グロナーシユ</sup>〉を撃ち落とした。これが事実です。我々は、それを踏まえたうえで、何をすべきか、冷静になって検討しなければなりません。何が起こるか予測し、適切に対処するのです」

エサルノア女王は、そこで間を置いた。

「よって、第一に、女王として魔導師らに命じます。〈見えない死<sup>グロナーシユ</sup>〉と〈天守り<sup>グロナーシユ</sup>〉の件を優先的に取り掛かり、解決に導くこと。わたくしは、この二点をエイネーの最重要問題と認識し、すぐさま処置を行うべきであると判断しました。魔導師は、この問題を早急に解決しなくてはなりません」

女王は、アリアと、そしてアートルウナとを、しっかり見つめた。エサルノ

ア女王は、一人の魔導師としてアトウナを認識しているのだ。その月色の目がアトウナを貫いたとき、彼女は、誇らしくて飛び上がりそうにもなったし、絶望で床にひれ伏しそうにもなった。女王に求められ、それに応じるということとは、魔導師をやめるという長年の願いを放棄するという意味だった。

アリアは、「はい」と返事し、アトウナは喉の奥から絞り出すような音を発した。返事をしたつもりだったが、うめき声に近かった。

「第二に、長たちへ、アバルバン谷への捜査班の編成を命じます。（クロナーシュを射貫いた槍について、調査する必要があります。捜査班の編成はお任せしますが、土地の者である自然の人は、必ず班に入ること」

エサルノア女王は、最後を、クレアナダ長（おさに向かって言った。自然の長（おさは、緊迫した面持ちで頷いた。

「では、編成が決まり次第、捜査班は、すぐにアバルバン谷へ向かわせてください。わたくしからは以上です」

女王の銀の目は、この場にいる一人一人に向けられた。アトウナは、思わず目を伏せた。横目に映るナクーが、大あくびをして犬歯を見せびらかしていた。



竜屋に預けていたエラドルスを迎えに行ったとき、アリアが言った。

「魔導師の木へ帰ったら、『基本単術集』の二十八頁を読んで」

「なんでよ」

アートウナは、再会に喜んで腕に絡みつく竜を引きはがそうとしながら、歯を剥いた。

「使い魔を指の付け根に巻き付けられるようにするためよ。腕ではなく、ね」  
アリアアは言い、それとなく拳を見せてきた。そこには、赤紫色に輝く美しい指輪がはまっていた。深く透き通った茶の宝玉は、彼女の使い魔シャーナの瞳の色とそっくりだ。

アートウナは、頬が赤くなるのを隠すために、わかりやすく目を回した。

「アリアアは、あたしの師じゃないでしょ。指図しないでよ」

「いちいち魔導師の使い魔を竜屋に預けるわけにはいかないでしょう。それを誇りに思っているならまだしも」

今日のアリアアは、いつになく嫌味な言い方をしていた。それは深々とアートウナに刺さったが、彼女の疲弊の色を見て、黙っていることにした。

「とにかく、まっすぐ帰ってよね。私は捜査班編成会議に出るから」ぼんやりした目をして、アリアアは言った。

「夕飯には戻る？」

「どうかしらね」

「指輪変化魔法のコツは？」

「呪文は《クンフナータ》よ。そう唱えながら、手を洗った後に布を見つけたれなかったあなたがいつもするようなことを、使い魔に向けてやるの」

アートウナは、すぐに理解した。びしょぬれになった手を瞬時に開き、指先の雫を飛ばす遊びは、鏡に向けても、アリアアに向けても、よくやっていた。その動きを、今度は呪文を交えて、エラドルスに向けてやれというのだ。

アリアアは、アートウナの背を押して、竜屋の敷地から出すなり、自分はエ

イリアレル城へ戻っていった。さっきの会話は、せめてもの見送りだということだろうか。ならば、ないほうがよかった、とアトウナは思った。中途半端な優しさは、粗雑に映る。

魔導師の木へ戻ると、とたんに独りの世界に包まれた。だれにも咎められず、必要とされてもいないところ。安堵と恐怖がどっと押し寄せてくる。長たちの、あの測るような目つきが思い出される。アトウナは、使い魔を引き連れ、上へ上へと駆け上がった。

ねじれた手すり、巨木のうねりにあわせてのびる階段、くり抜かれた丸窓や先の見えないてっぺんから、正午過ぎの光が細く差し込む。光の柱は、渦巻き階段の中央に下がる星や骨、毛皮の装飾を妖しくちらつかせた。アトウナは、壁にかかる魔除けの織物や、香木の並ぶ棚、魔法動物の体液が入った壺など、いくつも通り過ぎた。どこかで、暖かい金属的な音楽が鳴った。外からの鴉の鳴き声がぐもって聞こえる。エラドルスが顔のすぐ横を通って、さらに上の階へ向かった。彼は、天井からぶら下がる巨大なキノコの傘に座り、主人を待った。

壁側に、大きくくぼんだ通路が現れたところで、アトウナは足を止めた。ためらっていると、地面が波打ってアトウナを前へ押した。枝がこすれるような呻きと風のざわめきが、アトウナの髪を逆立て、揺らした。魔導師の木が、なにか主張している。日々成長し、部屋の位置も空間をも歪ませるこの木は―我が家は、主体のない守護者であるが、ときたま、理解の及ばない反応を示す。だが、その意図はいつも読み取れなかった。だからこそ、驚きつつも、反抗する気持ちは生まれなかった。

「たしかに、練習部屋に行くつもりだった。でも、別に、乗り気じゃないんだ

前へ前へと促す床につぶやきながら、アトウナは進んだ。風が、窓のない通路へ吸い込まれていく。それに押されるようにして、小さな魔導師は真四角の入口へ向かった。

扉はなく、殺風景な石造りの部屋が広がっている。四隅にちよつとした明かりが灯っているが、他は灰色の平たい面だった。

エラドルスが足元にやってきて、煙を一つ、鼻から噴き出した。

「不機嫌にならないで、エラドルス。あたしだって嫌なんだよ。でも、あなたのためなんだ。いつもで指にはめて、いつでも……一緒にいられるようにしたいの。あなたは役に立つから」

逃げるときに、ね。そう思いながら、アトウナは部屋の真ん中へ向かった。この部屋を指輪変化魔法の練習場所に選んだのは、失敗しても、どこにも飛び火しないからだ。自室でやろうものなら、石鹼と花の香りがする泡香草あわこっせうを詰めたお気に入りの枕が、あぶくになる可能性だってある。そんなの割に合わない。

この練習部屋は、術の習得に必要な道具や、あらゆる状況を再現できる有能な部屋であるそうだが、それを出す方法を、アトウナは知らなかった。ノウアが言うには、嵐一つつくすることも可能なのだそうだ。制御できる者にのみ、部屋の使い方を教えるのだとか。

アトウナは靴を脱ぎ、裸足で端まで駆けた。無機質で広大な空間が、衝動的にそうさせた。端は、どこまで行ってもたどりつかなかった。踏み出すたび、足の裏に埃の感触がある。

エラドルスは、虫のように天井に張り付き、走り回る主人をじっと見下ろした。

「見て、足跡！」

竜に向かって、アトウナは言った。積もった埃についた楕円は、入口から

こちらへずっと続いている。竜は、羽ばたいては張り付き、それを繰り返して前進した。

アトウナは、地面に息を吹きかけ、ぐるぐる回った。それから、胡坐をかき、後ろへ倒れた。そして、叫んだ。

応えるのは自分のこだまで、他はなにも聞こえなかった。やがては、それも灰色の壁に吸い込まれていった。

ここでは、魔導師の木はなんの反応も示さなかった。アトウナが悪態をつこうが、話しかけようが、あの波打つ動きは生じない。

「魔導師あんたの木も、あたしをほったらかしにするわけね」

天井へ手のひらを向け、開いたり閉じたりする。

(……おかしな家。おかしな魔導師たち。そう思うのは、あたしが変わだから？  
ねえ、エラドルス、ノウアは急いでいるような気がするの。アリアに、何でも覚えさせようと躍起になってる。ノウアはもう年だから。長の会おまにあたしたちを出したのも、それが理由。でも、そんなのって、嫌な感じ。道を敷かれて、『さあ、走っていけ！』って言われてる気分。どこに続いているかも、分からないのに。どうしてみんなは、それが怖くないの？」

エラドルスは、何度も手をぱっぴと開いている主人を、大きな瞳でじっと見ていた。それから、彼は天井に向かって青白い炎を吐きだした。アトウナは、眩しさと熱さに目つむった。

「あんたも、同感ってこと？」

すると、竜は力を抜いて落下し、アトウナの腹に着地した。

彼女は、竜をそっと撫でた。均一にさざめく鱗。首に生える柔らかな鶏冠。

足の肌を突く鋭い爪たち。竜は、とぐろを巻き、主人の手の中で一声二声、軋

るように鳴いた。

「竜が使い魔の魔導師は、力があるのよ」

ふと、以前聞いたアリアの言葉がよみがえった。（天守り）にとりつかれたマノを救ったあとのことだ。アリアは、魔導師の歴史にそう伝わっているのだと語った。

「哀れなアリア。どんな情報も鵜呑みにしちゃいけないって、自分で言うてくせに。『あら、あなた、あれは史実なのよ』。いや、違うよ。歴史は後あとから書き換えられちゃうんだから」

もし、アリアの言う通りだとしても、アートウナは信じたくなかった。強力な魔導師になどなりたくない。強い力というのは、大勢を虜にさせ、また孤独にもさせると、思い知っているから。

彼女は、竜の鱗に覆われた小さな頭を、片手で撫でまわした。彼は口角を持ち上げ、深く裂けた口から、ずらりと並んだ歯を見せた。恐ろしい形相だが、素敵な笑顔にも見えた。これが強力な魔力者の証拠であるなら、なんて不愛想で不安定なんだろう。

「……ねえ、あたしたち、これからどうする？ 毎日、こうやって自主練習をする？ そうして続けていったら、楽しいって思えるときがくるかな。アリアやノウアみたいに、淡々と魔導師の仕事をこなしていくのかな」

アートウナは、まわりを見渡した。訓練場は、やはり、自分一人しかない。彼女は向き直って、竜の群青色の瞳を見つめた。縦に切られたような瞳孔が、主人をぐつと見つめる。思わず、その瞼を閉じさせたくなる。

「……はい、ここで、〈クンフナータ（変化）〉。なーんてね」

冗談のつもりだったが、エラドルスの前で手をぱつと広げた瞬間、指先から

火花が飛び散り、驚いている竜の鼻先を駆け巡った。

エラドルスは叫んで飛びのき、首元まで走る火の粉を振り払おうとした。だが、鼻先はどんどん黒く、捻じれて細くなり、やがて円になって、しぼんでしまった。

アートウナは、呆気にとられた。金属音を立てて回る藍色の指輪を、信じられない思いで見つめた。

しばらく、練習部屋は静まり返っていた。その不気味さが、アートウナを震え上がらせた。

「エラドルス！ 嫌だ嫌だ、戻ってきて！」

エラドルスの指輪は、近くで見ると、驚くほど精巧で緻密な鱗が彫られているのが分かった。震える手で指輪を拾い上げたが、そのごつごつとした鱗と金属的な堅さに、ぞっとした。

自分は魔導師。煙を吐く、あの熱い竜を、一瞬にして冷たく小さな輪つかに変えてしまえる。

「もど……、もど……、戻さない、と」

指輪を持って、アートウナは練習部屋を飛び出した。

上がってきた階段をよるめきながら駆け降り、自室へ駆けこむ。本棚から、幼い時に貰って以降たいして開きもしなかった『基本単術集』をひっぱり出す。二十八頁を急いで探す。

焦りと怒りで歯を食いしばる。気まぐれにやったら成功した。魔導師だという証拠を、また増やしたのだ。

けれど、これで少しは認めてもらえるかもしれない……。ふと、そう思った自分に衝撃を受け、藍の指輪を凝視した。

「……指に、指輪をはめたまま、術を行う。……このときの呪文は、反対に唱



えること。唱えると同時に、手を広げ……」

紛らわすために読みながら、アートのウナは指輪をはめ、拳をつくると、正面に構えた。

そして、書かれている言葉を何度も確認すると、唱えた。

≪アトウーアヌフンク（戻れ）！≫

ぱっと手を開いた瞬間、指輪のある指の根元から、強い旋風が起こった。千切れるっ、と思った刹那、風はやみ、なにか黒々としたものが寝台に横たわっていた。

竜に戻ったエラドルスが、ぐったりと息をしていた。

「ああ！ エラドルス！」

竜は力なく、「ギユウ」と鳴いた。少し開いた青色の目は、混乱をみせている。

「エラ、エラドルス……」

首を撫で、肩、翼、尾を確認したが、異変はなかった。アートのウナは、息を吐いた。両手がぶるぶる震えている。

自分がなぜこんなに怯えているのか、分からなかった。この手は、この紫の目は、自分を何者にさせる気なのだろう。

魔導師の木は、いつまでも沈黙し続けていた。